

2017年10月1日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 10章1～8節

説教：神を恐れかしこむ

はじめに

イエス・キリストが墓の穴からよみがえられ、弟子たちに現れたとき、このように言われました。「聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、および地の果てにまで、わたしの証人となります。」

そのみことばのとおり、五旬節の日に人々に聖霊が降り、エルサレムに世界最初のキリスト教会が建てられ、多くの人々が救われ、次々と教会に集まるようになります。これを見ていて腹を立てたのが、ユダヤ教のなかでも超保守的で原理主義的なグループであるパリサイ派に属していたサウロという人でした。クリスチャンであるとわかれば、牢に投げ込み、教会を迫害し始めます。そのあまりの激しさから多くのクリスチャンがエルサレムから逃れ、地方の町や村に散らされていく。散らされた人々は、逃れていった場所でキリストを証しし、そこで救われる人たちが起こされていきました。教会にとっては大変な試練のときでしたが、この迫害を通してイエスの救いが拡大していったのです。気がつけば、「ユダヤとサマリアの全土で、あなたがたは私の証人となります」との御言葉のとおりになっていました。

でも、イエスがお語りになった、「および地の果てにまで、わたしの証人となる」というところはどうでしょう。イスラエルの国の中だけではなく、外国の地にまで拡大していく。一度だけ、エチオピヤ人の宦官だけは主

を信じるといことは起きましたが、多くの外国人が信じたわけではありません。このことはまだ起きていません。今日の箇所には、このみことばがどのように実現していったのかが書かれています。そのことは、私たちの信仰とも深く関わってきます。早速見て参ります。

1 コルネリオ

1) 百人隊長

ここに登場するコルネリオは、カイザリヤに駐留するローマ帝国軍の百人隊長です。イスラエルの国になぜローマ軍がいるのか。当時、イスラエルは、ヘロデ家のアグリッパ二世が支配する独立国の形をとってはいましたが、実際はローマ帝国の指示がなければ重要なことが決められない、言わば植民地のような扱いです。どうしてそんなことになったのか。話は数十年ほどさかのぼって、アグリッパ二世の先祖であるヘロデ王の時代のことです。国の内側では政権争いが絶えませんが、いつばう外からは大きな力を持った国からの攻撃にさらされています。このようなとき、権力者はいろいろなことを考えます。ヘロデ王はローマ帝国に巧みに取り入り、ローマ帝国の保護を求めます。その条件として出したのは二つです。ヘロデがイスラエルの王座に就くこと。その見返りとしてローマ軍がイスラエルに駐屯してかまわない。ローマはこれを受け入れ、それ以来、ローマ軍がイスラエルの中に駐留するようになりました。

しかしイスラエル国民にしてみれば、これは複雑です。ローマ軍がいるおかげで治安は守られています、神の約束の地であるイスラエルに外国人が土足で踏み込んで来たのです。歓迎する人などだれもいない。早く出て行って欲しいと思っています。そんな厳しい雰囲気の中でコルネリオがローマから派遣されてきた。

2) 敬虔な人

コルネリオの側からすればこのような場合、二つの選択肢が考えられます。イスラエル人とはいっさい関わらない。現地の人のことなど考えずにひたすら中央の司令に忠実に従い、任期が終わったらさっさと母国に戻る。多くの場合はこうするでしょう。しかしコルネリオは違います。彼はユダヤ教に改宗しました。形だけではない。困っている人がいれば自分のお金で施しをし、神に祈る敬虔な信仰者となる。家族や部下たちもそうします。ローマ人であるとか百人隊長であるとか、そのような国籍や肩書を越えて地元の人たちの中に溶け込もうと努力していました。

2 神と出会うとき

1) コルネリオの場合

そんなある日、コルネリオがユダヤ教のしきたりに従って午後三時の祈りをしていたとき、不思議なことが起きます。「コルネリオ」と自分の名を呼ぶ者の声が聞こえ、目の前に御使いが立っていました。その姿を見たとき、急に恐ろしくなり、「主よ。何でしょうか」と答えます。なぜ恐ろしくなるのでしょうか。彼は敬虔な人でしたから、何を見ても聞いても信仰をもって落ち着きながら向き合えばよいのではないかと。そんなふうに思

うかもしれません。

2) サウロ（パウロ）の場合

コルネリオだけではない。もっとも近い所では、サウロも同じような経験をしています。教会を迫害するためにダマスコに向かっている途上、突然に非常にまぶしい光があたりを照らし、驚いて地に倒れたとき、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」と呼びかける者の声を聞きます。その声を聞いて、サウロは恐ろしくなり、「主よ。あなたはどなたですか」と尋ねます。

3) なぜ恐ろしいと感じるのか

コルネリオは御使いに名前を呼ばれ、サウロは直接主から名前を呼ばれる。この二人のケース、呼んだ方が御使いとイエスと違いはありますが、状況はほとんど同じ。恐ろしいと感じた。なぜ恐ろしく感じるのでしょうか。

私たちの先祖であるアダムが神に造られたときはどうだったのでしょうか。神を直接見ても恐ろしいとは感じません。普通に会話できて、神と人との間にはなんの隔てもなかった。しかしその後、アダムが罪を犯してからどうなったか。神はアダムに呼びかけました。「あなたは、どこにいるのか。」するとアダムとエバは恐ろしくなって、木の陰に隠れてしまいます。

人は普段自分がどれくらい罪深い者であるか、ほとんど意識することはありません。例えてみればこんなことです。私たちは、生まれたときから罪を見分ける光のない世界で生きてきたと考えてみましょう。光がありませんから、自分がどんな色に染まっているか見分けられません。見えなくても、多分、白い服を着ているはずだと思っ込んでいます。

けれどもあるとき、真っ白な光に照らされる瞬間がきます。そこで初めて自分の着ていた服の色がわかる。白いと思っていたら、罪で真っ黒。きよい方の前に出るときは、きれいな服を着なければならぬ。それが真っ黒に汚れているわけですから、恥ずかしさを通り越して恐ろしくなる。だから神の声を聞くと木の陰に隠れてしまうわけです。これが人間の姿であると聖書は言います。

パウロもコルネリオも、していることは別々ですが、ユダヤ教においてはいずれも敬虔な信仰者と見られていました。それなのに神である方、きよい方に出会うとき、恐ろしいと感じた。自分の罪を自覚したからです。私たちも同じでしょう。「牧師はきよい方です」と言う方が時々いますが、それは訂正した方がよい。私だって神や御使いに出会ったら恐ろしくてぶるぶる震えると、いまから断言できます。

3 神の計画

1) 神はきよいものを用いる

コルネリオは、御使いから指示を受けて三人の部下をヨッパに宿をとっていたペテロの所へ遣わします。この後、ペテロがコルネリオの所へ招かれ、御言葉を語ると人々の上に聖霊が降り、ローマから来ていた異邦人が救われていきます。イエスが語った、「および地の果てにまで、わたしの証人となる」とのことばは、このようにして実現していきます。

コルネリオのことを読みながら、みなさんも祈るでしょうか。「どうかこの私を神のご計画のために用いてください。」でも祈った後で、疑問が湧く。自分は神のご用に役立つ器だろうか。とてもふさわしいとは思われな

い。というのは、第二テモテへの手紙 2 章 21 節にこうあるからです。「ですから、だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら、その人は尊いことに使われる器となります。すなわち、聖められたもの、主人にとって有益なもの、あらゆる良いわざに間に合うものとなるのです。」

「だれでも自分自身をきよめて、これらのことを離れるなら」の「これらのこと」とは「不義」とか「不敬虔なこと」を指しています。いずれにしても神のご用に役立つためには、まず自分自身をきよめなくてはなりません。これはとてもできそうにありません。

では、サウロはどうだったのでしょうか。コルネリオはどうだったのでしょうか。確かに二人は熱心なユダヤ教徒でした。しかしサウロは教会を厳しく迫害し、イエス・キリストを迫害していたのです。コルネリオも熱心なユダヤ教徒で、きちんと祈りをし、施しをして律法を守ろうとしましたが、彼は外国人でした。ユダヤ人でない者は救いを受ける権利がない。当時だれもがそう確信していた。このふたりは当時の常識から言えば、とても神のご用に役立つ器になるはずはない。そんな人たちだったのです。

2) 主のご計画が鮮やかになされていく

ところが神のご計画は、本当に不思議です。もつともふさわしくないとされる者を使おうとされる。ですから、私はふさわしくないと落胆する必要がない。神はどんなものであっても用いることができる。ただし一つだけ条件がある。それは「だれでも自分自身をきよめるなら」です。これを聞いて多くの方は落胆したかもしれませんが、安心してください。自分で自分をきよめられる人はいませ

ん。もしいたら、イエス・キリストはいらない。

ではどういう意味か。サウロを見てください。コルネリオを見てください。この二人、自分で自分をきよめたのか。熱心だったかも知れないが、きよくなかったことは確かです。なぜわかるか。イエスに出会ったとき、主の御使いに会ったとき、恐ろしくなった。自分の罪汚れが目の前に迫ってきて怖くなった。まったくきよくなかった。けれどもこの二人を用いていく。サウロは異邦人への伝道師として遣わされます。コルネリオのことから、神は異邦人も救おうとしていることをイスラエルの教会がはっきりと認識する大きなきっかけにもなりました。

そうしますと、だれがこのふたりをきよめたのか。主です。私は神の前に汚れた罪人に過ぎない、と悲しむ者の前にこの方は立ってください。私は神のご用に役立つことなどともできないけがれた者ですと落胆する者の所に来てくださる。そして名前を親しく呼んでくださる。

逆説的かも知れませんが、罪を悲しむ者こそが、罪をきよめられている。そのようにしてください。主の御名をあげたいと願います。